

グローバル社会における高等教育機関の留学生支援

- 日本の文系大学院生が求めている支援と大学側の支援制度 -

陶一然(トウ イツゼン)

立命館大学社会学研究科応用社会学専攻(中国)

1 はじめに

地球のグローバル化は経済、政治だけではなく、教育にも大きい影響を与えている。世界の大学や大学院など高等教育に在籍する留学生数は、1990年で約130万人、2014年には約450万人となり、1990年から2014年までの間に世界全体の留学生総数は3.5倍に増えた¹。各国の大学の中に留学生の割合が高くなり、留学生支援が大きい課題になっている。今、「留学生30万計画」を掲げている日本もその課題に直面している。日本の各大学は留学生を多く受け入れるために、留学生支援制度を整えている。しかし、その制度の多くは留学生の多数を占めている学部生向けのものであり、大学院生向けの支援制度がまだ少ない。日本にやってくる留学生の数が大きく増えている中、大学院の留学生数は伸び悩んでいる²。その原因の一部は支援制度の不十分ではないか、と筆者は考えている。

本稿は日本の文系大学院に在学している留学生に焦点を当て、大学院留学生がどのような支援を求めているのかを明らかにする。

2 先行研究

これまで日本にいる留学生を調査する研究が多く行った。その中に大学側が実施した調査が特に注目すべきである。それは大学側が実施した調査の結果は留学生支援に直接反映するからである。

しかし、大学側が実施した調査は二つの問題点がある。一つは留学生の回答率の悪さである。2003年横浜国立大学で実施されたアンケート調査³の回答率は29%にとどまり、数で勝る学部生より大学院生の回答数のほうが多いという逆転現象が起きた。また大学で実施する留学生アンケート調査は留学生が多く集まる日本語講義や大学の留学生センターで実施することが多く、積極的に大学の行事に関わる留学生の意見が多く反映される可能性がある。もう一

つの問題は、アンケートの対象は留学生全員のケースが多く、質問の内容が限定されており、特定の学部や大学院生の意見があまり反映されていない。たとえば、前述の横浜国立大学のアンケート調査の結果の中に「学部留学生は、研究生、大学院留学生と比べ、さまざまな事柄について困難を感じている学生の割合が高い。」という結果が書かれている。その中の「さまざまな事柄」はアンケートの質問項目から判断する。しかし、そのアンケート項目の中に「住居」、「学習」、「アルバイト」が中心であり、大学院留学生の「さまざまな事柄」からかけ離れているのではないかと、筆者は疑問を感じている。

大学院留学生が困難を感じている「さまざまな事柄」について、郭(2016)は質的調査の手法で調査した。郭(2016)は一人の中国人大学院生のケースを取り上げ、その人の大学院の学術的コミュニティへの参加に失敗した原因を探った。大学院留学生の大学生活の中心が学部留学生と異なるため、学術的コミュニティへの参加や他の研究面から困難を感じる人が多いと考えられる。郭(2016)の調査の中に「授業以外でのゼミメンバーとの付き合い」など、人間関係に関する内容が多い。大学院留学生は少人数の講義に参加することが多く、人間関係への関心が学部生より高いという傾向がある。郭(2016)の研究は大学院留学生の研究生生活における困難を調査したが、それは大学院留学生の生活全般に対するものではなく、大学院留学生が直面している困難の全体図を見るために、更なる調査が必要である。

3 問題意識

今までの調査の中で、大学院留学生が直面している困難に関する調査があるものの、大学院留学生がどのような支援を求めているのかを解明する調査がない。大学側の調査は学部留学生中心であるため、大学院留学生向けの支援制度の見直しは遅れている。今回の調査対象であるA大学の大学院留学生向けのパンフレットの中に留学生支援の制度が多く紹介されているが、そのすべては学部留学生向けの支援制度と同じである。よって、大学院留学生のために作られた支援制度はないといえるだろう。それでも大学院留学生向けのパンフレットの中に学部留学生と同じ留学生支援制度を載せることは、大学側にとって大学院と学部の留学生が求めている支援はほぼ同じであると考えられる。この大学側の考えと大学院留学生の実態は一致するだろうか。本稿はこの問題を明らかにする。

4 調査方法

本調査は私立大学A大学文系研究科の博士前期課程1回生全員にインタビュー調査を行

った。調査は半構造化インタビューで、インタビュー時間は1人30分である。調査対象は男2名と女7名⁴、国籍は中国8人、韓国1人である。インタビューの時期は2017年6月である。1回生を調査対象として選んだ理由は、博士前期課程の1回生はまだ大学院の生活に慣れていないため、彼らを感じている困り事や人間関係の悩み、大学側に求めたい支援はほかの大学院院生より多いと推測したからである。

本調査は主に、調査対象である大学院留学生自身の困り事、調査対象がどのような支援を求めているのかという二つの疑問を基づいて展開した。

5 インタビュー調査 ―大学院留学生は何を求めているのか―

5.1 人間関係

インタビューの中で一番多く言われているのは人間関係の問題である。「日本人学生との交流が少ない」、「日本人学生との共通話題が少ない」、「日本人との交流に言葉の壁がある」、「日本人の友人が少ない」など、日本人院生との交流が少ない意見が多い。それは前述の郭(2016)の中でも同じ内容が見られる。共通の話題と言葉の壁が交流の壁になっている。しかし、郭(2016)は調査対象と指導教員との間にも交流の問題があると言及したが、本調査ではそのような問題が少なく、逆に「先生(指導教員)との関係は良好」の意見が多い。

ここで注目すべきことは、人間関係に悩まれている大学院留学生が多数存在しているが、大学側の支援を求める声がない。「飲み会もっと開催して欲しい」という意見があるものの、それは指導教員への要望である。

5.2 学習・研究

大学院生活の中に論文執筆やレジюме作成が多く、それに関する内容が多い。「レポートの書き方が分からない」、「レジюмеの負担が多い」、「批判的書き方のサポートが欲しい」、「日本語レポート作成の支援が欲しい」、「レポートの書き方より考え方を言語化する訓練が欲しい」など、レジюмеやレポートの書き方に関する要望が多い。その中に支援を求める声もある。

また、言語方面だけではなく、日本の大学院の講義方式に対する要望も多い。「講義の目標は明確ではない」、「日本の教学方式に慣れていない」、「授業の内容は完璧に理解できない」など、大学院留学生の中に講義への不満の声が多い。横浜国立大学(2003)

が実施した学部留学生も含むアンケート調査の中にそのような声はなかった。少人数の講義が多い大学院ならではの特徴だと考えられる。特に、「言語より考え方を重点とする講義のほうが望ましい」みたいに、具体的な要望もあり、それは学部留学生にあまりない特徴である。

5.3 生活関連

大学院生は成人であるため、生活関連の困り事が少ないと言われている。本調査でも生活関連の要望が一番少ない。「日本の生活もう長いから、もう慣れている」、「交通不便のため、通学がしんどい」、「日本の物価が高い」など、経済面や交通面の要望があるものの、ほかに生活の問題は特になく、要望もない。調査対象の中、日本での生活期間が一年以下の人は一人もなく、全員慣れているという面が大きい。

5.4 大学側の支援について

大学側に求める支援を聞く前に、大学側が実施している留学生支援制度について質問したが、利用したことがある人が皆無で、その存在すら知らない人もいる。利用しない理由は「利用できそうな制度がない」意見が最も多い。大学側に求めている支援は「奨学金が少ない、院生と学部生の待遇が異なる」、「留学生奨学金が少ない、評価基準が分からない」など、奨学金に関する意見が多い。奨学金を増やす要望より、評価基準の開示を求める声が多い。そのほか「院生でも入りやすいサークルが少ない」、「異文化コミュニケーション活動のような交流活動をより多く開催してほしい」という意見があり、それは 5.1 人間関係との関連性がみえる。

6 まとめ

本調査は大学院留学生から要望を聞き、「人間関係」、「学習・研究」、「生活関連」という三つのカテゴリーに分類した。その三つの中に最も多い内容は「人間関係」で、大学院留学生の多くが同じ研究科の日本人との交流に悩まれている。

「学習・研究」に関して、日本語やレジュメの負担、講義の方法など多様な要望がある。それは学部留学生にあまりない要望で、大学院留学生ならではの特徴といえる。学部留学生と同じ支援制度を使う場合、「学習・研究」はカバーできないことは明らかである。

今までの大学側の支援制度に多く占めている生活支援について、大学院留学生はあ

まり求めていないことも明らかになった。本調査の中に大学院留学生が求めている支援は、主に前述の「学習・研究」と奨学金の透明化、交流イベントの充実である。奨学金や交流イベントは学部留学生と同じ支援制度でカバーできるものの、「学習・研究」は大学院向けの支援制度を作る必要がある。これから大学側は大学院留学生の要望を調査し、そのニーズに合う支援制度を作るべきである。

参考文献

郭菲(2016)「中国留学生の日本大学院の学術的コミュニティへの参加」;『阪大日本語研究』28

¹ OECD「Education at a Glance」(2011年、2014年)の調査による。

² 2016年度の日本学生支援機構の調査によると、留学生全体の数が2012年から約8万人増加したが、大学院の留学生の増加は4000人に止まり、全体に比べ、伸び悩んでいる。

³ 藤井桂子・門倉正美(2003)「留学生は何に困難を感じているか - 2003年年度前期アンケート調査から - 」より

⁴ 日本人1回生は20名